

## 〈新刊紹介〉

岡崎正継著

### 『中古中世語論攷』

本書は、これまでの著者の既発表論文をまとめたものであり、語法篇、語彙篇、キリシタン資料篇の三篇から構成される。和泉書院研究叢書 475 巻として刊行された。

語法篇には、「第一章 推定伝聞の助動詞「なり」について——その承接と意味——」、「第二章 今昔物語集の「今夜」と「夜前」と」、「第三章 源氏物語の「給ふる」「侍り」について」、「第四章 「申す」「聞えさす」「聞ゆ」——官位・身分・人名を承ける場合について——」、「第五章 中世の敬語——受益敬語について——」、「第六章 「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐる」が収められる。

続いて語彙篇の「第七章 源氏物語用語の清濁について」は、「Ⅰ 首書源氏物語の「ときとき」と「ときどき」」、「Ⅱ 「調す」清音のこと」、「Ⅲ 「螺鈿」は「ラテン」であった」とで構成され、そのほかに「第八章 「けそん」は「家損」なりや——源氏物語用語考——」、「第九章 「ウソ」の語源」、「第十章 「ハッケヨイ」の語源」が含まれる。

キリシタン資料篇には、「第十一章 オ段長音の開合について——ロドリゲス『日本文典』覚書——」、「第十二章 日葡辞書の和訳について」、「第十三章 日葡辞書の *Vqevô* の語義——*ficar deuendo* の訳語について——」、「第十四章 「アサガレイ（朝餉）のことなど——日葡辞書のことば——」、「第十五章 日葡辞書の「サメ」「フカ」「ワニ」について」が収められる。  
(2016年5月10日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 264頁 8,500円+税 ISBN 978-4-7576-0792-7)

山口佳也著

### 『「のだ」の文とその仲間・続編——文構造に即して考える——』

本書は、筆者が自身の研究をまとめ2011年に刊行した論文集『「のだ」の文とその仲間 文構造に即して考える』に続く論文集である。「のだ」が関わる構文だけでなく、様々なタイプの文を対象とした構文論的研究が収められている。

本書の構成は次の通りである。「序章」に続き、第一部に「第一 「のだ」の文のとらえ方」、「第二 「はず」をめぐる（その1）」、「第三 「はず」をめぐる（その2）」、「第四 「はず」をめぐる（その3）」、第二部に「第五 「もの」の用法概観」、「第六 「ものか」の反語文について」、「第七 「二度ない」その他」、「第八 可能表現としての「できる」の用法」、「第九 「車は急に止まらない」その他」、「第十 「～から」と「～ので」のかかり先について」、「第十一 「からといって」について」、「第十二 文節末の「か」の用法」、「第十三 文節中の「か」の用法」、「第十四 「～かもしれない」とその周辺」、

第三部に「第十五 構文論と句読法」,「第十六 形容詞「ない」の正体」,「第十七 万葉集の文中のヤについて」を収め,「終章」へ続く。末尾に「初出一覧」「索引」「あとがき」を付す。

(2016年5月10日発行 三省堂刊 A5判縦組み 347頁 7,800円+税 ISBN 978-4-385-36512-1)

飛田良文監修, 田口雅子編著

『佛語箋——研究・索引・影印——』

本書は, 和仏単語集である『佛語箋』所収の語彙を近代日本語成立史, 翻訳語史などの研究資料として提供することを目的に刊行された。『佛語箋』に影響を与えた『三語便覧』との関係や, 『佛語箋』の編集過程などを含む解説に加え, 日仏両語の索引と影印を収録する。『佛語箋』は刊行年をはじめ, 誤訳や誤記なども含め未解明の部分が多いが, 本書によって日仏交流初期の両語を捉える貴重な資料であることが示される。

本書は「『佛語箋』研究」, 「『佛語箋』索引」, 「『佛語箋』影印」の3部構成となる。まず, 「『佛語箋』研究」の部には, 「一 『佛語箋』以前のフランス語単語集と加藤雷洲」, 「二 『佛語箋』の書誌と所蔵状況」, 「三 発行書林と刊行年」, 「四 『佛語箋』・『三語便覧』の関係」, 「五 『佛語箋』・『三語便覧』の表記比較」, 「六 『佛語箋』の編集過程」, 「七 『佛語箋』と出版事情」, 「終章」が含まれる。また, 「『佛語箋』索引」の部には, 凡例のあと「『佛語箋』日本語索引」, 「『佛語箋』フランス語索引」が含まれる。続いて「『佛語箋』影印」が収められ, 末尾には「あとがき」がつく。

(2016年5月14日発行 港の人刊 A5判横組み 616頁 15,000円+税 ISBN 978-4-89629-314-2)

半沢幹一著

『言語表現喩像論』

本書は, 喩像をめぐる諸問題を論じたものであり, 主に喩像におけるイメージを意味する「喩像」の観点を中心にまとめられる。「第一章 喩像の基礎」, 「第二章 喩像の機構」, 「第三章 喩像の分類」, 「第四章 喩像の位置」の四章から構成され, 各章とも三節から成る。

第一章には, 「ことばの記号性と表現性」, 「ことばの美しさとイメージ」, 「ことばのわざとらしさ」。第二章には, 「喩像の方向と距離」, 「喩像の意味と像(イメージ)」, 「喩像の生と死」。第三章には, 「喩像の種類と基準」, 「直喩の規定と区別」, 「擬人法の発想と表現」。第四章には, 「喩像の文体論的位置」, 「喩像の文化論的位置」, 「喩像の表現論的位置」。末尾に, 「喩像研究の発想イメージ図式抄録」と「あとがき」を付す。

本書は, 共立女子大学・短期大学総合文化研究所の平成28年度研究助成を受け刊行された。

(2016年5月15日発行 おうふう刊 A5判横組み 264頁 2,500円+税 ISBN 978-4-273-03782-6)

藤田耕司・西村義樹編

『日英対照文法と語彙への統合的アプローチ  
——生成文法・認知言語学と日本語学——』

本書は、時には鋭く対立することもある生成文法と認知言語学の2つの言語理論に加え、日本語に関する記述的研究の各分野に関する研究を収めた論文集である。さらに、各論文に対して一つずつ異なる立場の研究者からのコメント論文とともに収録され、各研究領域の交流が可視化されている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」に続き、「第I部 生成文法編」に「第1章 日英語に見る主語の意味役割と統語構造(長谷川信子)」、「第2章 生成文法と認知言語学との対話は可能か?——長谷川論文へのコメント——(西村義樹・長谷川明香)」、「第3章 統語論の自律性仮説について(田窪行則)」、「第4章 「シンタクスの自律性」と「文法性」——田窪論文への脚注として——(西村義樹・藤田耕司)」、「第5章 日本語モーダル述語構文の統語構造と時制辞の統語的役割(竹沢幸一)」、「第6章 統語構造の異なりと意味——竹沢論文の類例の検証——(天野みどり)」、「第7章 自然言語と数詞のシンタクス(平岩健)」、「第8章 数詞のシンタクス——平岩論文へのコメント:日本語史研究の立場から——(小柳智一)」、「第9章 受動動詞の日英比較——生物言語学的アプローチの試み——(藤田耕司)」、「第10章 併合をめぐるあれやこれや——藤田論文へのコメント——(本多啓)」、「第II部 認知言語学編」に「第11章 英語の定冠詞句と日本語の裸名詞句の類似(坂原茂)」、「第12章 知識ベースの構造について——坂原論文に対するコメント——(田窪行則)」、「第13章 事象統合からみた主要部内在型関係節構文——「関連性条件」再考——(野村益寛)」、「第14章 関連性条件からみた主要部内在型関係節の諸問題——野村論文の意義と再解釈——(平岩健)」、「第15章 自律移動表現の日英比較——類型論的視点から——(古賀裕章)」、「第16章 「スロット」に基づく分析と日本語——日本語研究の立場からみた古賀論文——(三宅知宏)」、「第17章 間主観性状態表現——認知意味論からの考察——(本多啓)」、「第18章 非変化の「なる」の歴史——本多論文への日本語史のアプローチ——(青木博史)」、「第19章 語彙、文法、好まれる言い回し——認知文法の視点——(西村義樹・長谷川明香)」、「第20章 生成文法と認知文法のインターフェイス——西村・長谷川論文が示唆するもの——(藤田耕司)」、「第III部 日本語学編」に「第21章 逸脱的「それが」文の意味解釈(天野みどり)」、「第22章 接続詞的「それが」の意味解釈は「それ+が」から導出可能ではないのか?——天野の「連鎖文類型」アプローチに対する批判的検討——(竹沢幸一)」、「第23章 日本語の疑似条件文をめぐって(三宅知宏)」、「第24章 「疑似条件文」の統語構造——三宅論文の「係り結び」的一般化の統語的考察——(長谷川信子)」、「第25章 語彙-文法変化——内容語生産と機能語生産——(小柳智一)」、「第26章 語彙化・文法化・語形成——小柳論文の「内容語生産と機能語生産の見取図」をめぐって——(野村益寛)」、「第27章 語から句への拡張と収縮(青木博史)」、「第28章 句の包摂現象と文法化

——青木論文が文法化に示唆するもの——（古賀裕章）, 「第 29 章 助動詞選択とは何か——日本語学史の視点から——（斉木美知世・鷺尾龍一）, 「第 30 章 助動詞選択と動詞統語論——斉木・鷺尾論文が提起する理論的問題の検討——（藤田耕司）」の各論文を収める。末尾に「索引」, 「執筆者紹介」が付く。

（2016 年 5 月 20 日発行 開拓社刊 A5 判横組み 474 頁 6,600 円＋税 ISBN 978-4-7589-2224-1）

NHK 放送文化研究所編

### 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』

本書は、1943 年に発行された『日本語アクセント辞典』に始まり、1998 年発行の『NHK 日本語発音アクセント辞典』から 18 年ぶりとなる 5 度目の改訂を経て、書名も「新辞典」と改められた日本語の発音・アクセントを収録した辞典である。この改訂によって、収録語数の大幅な増加だけでなく、アクセント記号の一新・カラー表記、動詞・形容詞の活用形も本編に掲載、数詞＋助数詞、複合名詞、助詞・助動詞のアクセントの一覧表の充実等の変更が加えられている。

本書の構成は次の通りである。「ごあいさつ」「まえがき」に続き、「Ⅰ この辞典の記号について」、「Ⅱ この辞典の決まり」があり、「本編」に各項目を記載する。末尾には「付録」として「1 解説編」に「Ⅰ この辞典で扱う発音とアクセントについて」、「Ⅱ アクセントの示し方について」、「Ⅲ 発音・アクセント全般について」、「Ⅳ この辞典で扱う日本地名のアクセントについて」、「2 資料編」に「Ⅰ 複合名詞の発音とアクセント」、「Ⅱ 数詞＋助数詞の発音とアクセント」、「Ⅲ 助詞・助動詞等の付属語が付いた時の発音とアクセント」を収める。

（2016 年 5 月 25 日発行 NHK 出版刊 B6 判横組み 1739 頁 5,000 円＋税 ISBN 978-4-14-011345-5）

庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編

### 『日本語文法研究のフロンティア』

本書は、現代日本語の文法研究における各研究領域とその周辺領域における開拓的研究を収めた論文集であり、野田尚史氏の還暦を機に編まれたものである。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」に続き、「形態論と統語論のフロンティア」に「動名詞の構造と「する」「させる」の分布（田川拓海）」、「現代日本語における未然形（佐々木冠）」、「旧 JLPT 語彙表に基づく形態素解析単位の考察（森篤嗣）」、「名詞並置型同格構造（森山卓郎）」、「文の階層性と文中要素の解釈（長谷川信子）」、「意味論のフロンティア」に「日本語に潜む程度表現（中俣尚己）」、「母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈（天野みどり）」、「構文としての「切っても切れない」（佐藤琢三）」、「文章・文体・発話研究のフロンティア」に「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性（石黒圭）」、「話しことば的」な文章に見られる話しことばとは異なる表現（野田春美）」、「4 つの発

話モード（定延利之）, 「対照研究, 習得・日本語教育研究のフロンティア」に「日本語と中国語の真偽疑問文と確認文の意味（井上優）」, 「教育現場とのつながりを意識した対照研究の試み（カノックワン・ラオハブラナキット・片桐）」, 「第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて（渋谷勝己）」, 「「産出のための文法」から見た「は」と「が」（庵功雄）」, 「非母語話者の日本語理解のための文法（野田尚史）」の各論文を収める。また, 「あとがき」として「野田さんの後を追いつつながら（庵功雄）」, 「野田先生の筑波時代（佐藤琢三）」, 「野田先生との5時間（中俣尚己）」と題する3つの野田尚史氏に関する文章が収録されている。

(2016年5月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 335頁 3,800円+税 ISBN 978-4-87424-700-6)

福嶋健伸・小西いづみ編

### 『日本語学の教え方——教育の意義と実践——』

本書は, 日本語学の教育についての議論の出発点として, 日本語学を学ぶ学生に向けて発信する教育の意義や授業の実践例をまとめた書である。学部生の教育にテーマを絞り, 授業実践報告のみならず執筆者の考える授業の意義や方向性も十分に示すといった編集方針を掲げ, 日本語学の教育に携わる者が具体的に授業のありかたを考えられるように配慮されている。2015年度日本語学会秋季大会におけるシンポジウム（「日本語学をどのように教えるか」）をきっかけに, その企画者とパネリストを中心にまとめられた。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」, 「chapter1 プレゼンテーションを通して文法リテラシーを身につけよう（前田直子）」, 「chapter2 クイズで教える日本語教育文法（山内博之）」, 「chapter3 大学での古典文法教育（小田勝）」, 「chapter4 語彙の体系性・多様性を意識し相対化する——事前課題とグループワークを取り入れた授業実践——（金愛蘭）」, 「chapter5 グループワークで行う意味分析の授業実践——「ことば」の意味を考える教材と活動を中心に——（茂木俊伸）」, 「chapter6 日本語学だからこそできる国際交流——Skypeを利用した日中合同演習授業——（中俣尚己）」, 「chapter7 「初めて学ぶ日本語音声学」をどう教えるか——「日本語の音声」授業実践報告——（高田三枝子）」, 「chapter8 「日本語学」でなければ面白いことができる——音韻史から何を学ぶか——（高山知明）」, 「chapter9 アンケート調査実習を通して日常の言葉を日本語学の俎上にのせる（小西いづみ）」, 「chapter10 「空からみる日本語」の授業実践——「方言」を通して日本語と日本社会を俯瞰する——（日高水穂）」, 「chapter11 日本語学教育に英語の多読教育を応用する——もう二度と「日本語学の本を読むと眠くなる」とは言わせない——（福嶋健伸）」, 「chapter12 教養としての「役に立つ日本語」の授業実践——保幼小教員養成現場における「日本語学」の意義——（森篤嗣）」, 「chapter13 大学での日本語史入門——私はこんな授業をしている——（金水敏）」。末尾に「おわりに」と「執筆者紹介」を付す。

(2016年6月1日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 270頁 2,200円+税 ISBN 978-4-87424-698-6)

小野正樹・李奇楠編

## 『言語の主観性——認知とポライトネスの接点——』

本書は、コミュニケーション、語用論研究において重要な「主観性」「認知」「ポライトネス」を軸とした理論的研究、対照研究、第二言語学習研究を収めた論文集である。

本書の構成は次の通りである。「第1章 中国語・日本語の構文から見る主観性（李奇楠）」、「第2章 日英語における時間のメタファーと主観性——言語使用の三層モデルからの視点——（廣瀬幸生）」、「第3章 日中両語のヴォイスに見られる視点のあり方（彭広陸）」、「第4章 主観性の相違による言語使用への影響について——中国語人日本語学習者が使う日本語を例に——（趙華敏）」、「第5章 日本語文学作品の中国語翻訳における主観的干渉（于榮勝）」、「第6章 「行為の方向づけ」の「てくる」の対照言語学的・歴史的研究——移動動詞から受影マーカーへ——（澤田淳）」、「第7章 主観性の観点から見た日韓語の親族呼称——人称接尾辞「~さん」と「~님 (nim)」を中心に——（蔡盛植）」、「第8章 「カモシレナイ」における可能性判断と対人配慮（山岡政紀）」、「第9章 事態の把握と表出——自動動詞の用法との関わりから——（牧原功）」、「第10章 《不満表明》における「よ」とポライトネス（金玉任）」、「第11章 引用表現における事態把握と伝達——構造と機能——（小野正樹）」の各論文を収める。末尾に「索引」、「執筆者紹介」が付く。

（2016年6月5日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 213頁 3,400円+税 ISBN 978-4-87424-699-3）

戦慶勝著

## 『中国語と日本語における目的表現の対照研究』

本書は、現代中国語の目的表現に関わる諸形式と現代日本語の目的表現に関わる諸形式を対象とした対照研究を行い、その文法的、意味的、機能的特徴における共通点および相違点を明らかにし、それらが第二言語の習得にどのような影響を与える可能性があるかまで論じたものである。

本書の構成は次の通りである。「序章」に続き、「第1編 中国語の一次的目的表現と二次的目的表現の意味・用法について」に「第1章 “为”類の目的表現の構文的分布」、「第2章 “以”類の目的表現の構文的分布」、「第3章 “免得”“省得”の構文的分布」、「第4章 “为”類の目的表現と“以”類の目的表現の役割分担」、「第5章 “为了+不”と“免得”“省得”の使用条件」、「第2編 日本語の一次的目的表現と二次的目的表現の意味・用法について」に「第6章 タメの構文的分布」、「第7章 ヨウニの構文的分布」、「第8章 タメとヨウニの役割分担」、「第3編 中国語の目的表現と日本語の目的表現に関する総合的分析」に「第9章 一次的目的表現の対照分析」、「第10章 二次的目的表現の対照分析」、「終章 本研究の言語学的意義と言語教育学的意義」を収める。末尾に「主要参考文献」、「用例出典」、「あとがき」、「初出一覧」、「索引」が付く。

栄原永遠男編

『正倉院文書の歴史学・国語学的研究——解移牒案を読み解く——』

本書は、正倉院文書に含まれる解移牒案に関する論文集であり、大阪市立大学における正倉院文書のゼミと関連して開始された解移牒案の輪読会のメンバーによるこれまでの成果をまとめたものである。天平宝字年度の写経所文書に残る五通（「造東大寺司写経所公文案帳」、「御願経奉写等雑文案」、「奉写一切経所解移牒案」、「造石山寺所解移牒符案」、「奉写二部大般若経解移牒案」）を対象とする。本書は、和泉書院日本史研究叢刊 30巻として刊行された。

本書の構成は以下の通りである。「序——扉をすこし開けたこと——（栄原永遠男）」、「天平宝字期の解移牒案について（山下有美）」、「梓工達の訴え——下道主の文書作成の苦心——（中川ゆかり）」、「正倉院文書における文末の「者」（桑原祐子）」、「「并」字の使用法から文字の受容・展開を考える——「並」「合」との比較から——（方国花）」、「解移牒符案にみえる訂正方法とその記号について（井上幸）」、「正倉院文書における督促の表現——「怠延」を中心に——（根来麻子）」、「古代日本独自の用法をもつ漢語——「返却」「却還」「還却」「解却」——（宮川久美）」、「写経生の任用について（濱道孝尚）」、「正倉院文書にみえる浄衣（渡部陽子）」、「天平初期の帳簿——解移牒符案の源流を求めて——（栄原永遠男）」。末尾に「あとがき（桑原祐子）」と「執筆者一覧」を付す。

(2016年6月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 376頁 12,500円+税 ISBN 978-4-7576-0803-0)

赤瀬川史朗・プラシャント パルデシ・今井新悟著

『日本語コーパス活用入門——NINJAL-LWP 実践ガイド——』

本書は、日本語コーパスツール NINJAL-LWP に関して、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」と「筑波ウェブコーパス」を対象に現在公開されている2つのツールを取り上げ、その活用方法を紹介した入門書である。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」に続き、「〈基礎編〉コーパスとコーパスツールの基礎」に「第1章 日本語コーパスとコーパスツール」、「第2章 NINJAL-LWP の機能」、「〈応用編〉レキシカルプロファイリングツール NINJAL-LWP の活用」に「第3章 『基本動詞ハンドブック』の執筆における利用」、「第4章 類義語・対義語・ゆれのある語の調査」、また「〈研究編〉コーパスに基づく言語研究」に「第5章 基本動詞「置く」の本動詞用法から補助動詞用法への文法化」、「第6章 語彙的自他動詞対における形式的な有標・無標さの予測」を収める。末尾に「索引」が付く。

(2016年7月20日発行 大修館書店刊 A5判横組み 194頁 2,400円+税 ISBN 978-4-469-22255-5)

峰岸明著

## 『平安時代記録語集成 上』

本書は、著者が生前、蒐集した約三万語に及ぶ記録語をまとめたものである。十年以上の歳月をかけ、『貞信公記』、『九暦』、『小右記』、『御堂関白記』、『権記』、『左経記』、『春記』、『帥記』、『水左記』、『後二条師通記』、『兵範記』の十一の日記から用例を蒐集した。吉川弘文館編集部が著者のデータに遺された刊本所出箇所を表示に従い、著者によって入力済んだ部分の形式に倣って年月日あるいは引用文を入力する整理作業を行い編まれた書である。一項目は「親字（第一字）の見出し」「項目の見出し」「用例所出箇所」「引用文」から構成される。

(2016年8月20日発行 吉川弘文館刊 四六倍判 1608頁 34,000円+税 ISBN 978-4-642-01474-8)

峰岸明著

## 『平安時代記録語集成 下——附 記録語解義——』

本書は、上記の『平安時代記録語集成 上』に続く下巻である。下巻には、「記録語解義」が附載する。著者は、『色葉字類抄研究並びに索引 本文・索引編』（昭和39年6月）の「あとがき」において記録語辞典の構想を示しており、記録語辞典編纂のために原稿をまとめていた。それらの原稿を改めて整理し、約二千項目を「記録語解義」として附載した。記録語解義は、辞典の記述内容を検討するための資料として執筆された項目と、ほぼ辞典の項目の体裁を備えた、主に日本史関連の項目とから構成されている。一項目は「見出し」「読み」「品詞等」「語義」「用例」「読みの証例」から成る。

(2016年8月20日発行 吉川弘文館刊 四六倍判 1576頁 34,000円+税 ISBN 978-4-642-01475-5)